

感激の山

2017.09.01

久家 隆男

富士山を思いもかけずに列車や車の車窓から見たときや、旅館やホテルの窓から見たときなどに、殆どの人は「富士山が見える！」と歓声を挙げる。富士山は日本一の高さに加えて優美な姿をしているため、人々に愛されているからだと思う。更に、山登り

をしたことがない人でも一目で富士山だと分かることだとも思う。

私も予期せぬ所で富士山を垣間見たときには「オツ！」という感じになる。しかし、そのときの感激は一般の人より薄いかも知れない。理由はいくつかある。

先ず、富士山は初心者が多数登る山だと思う。このため



装備がひどい人が多い。私がツアーバスで行ったときは終日雨が降り続いていた。5合目で下りたバスの乗客は40人位だったが、上下の雨具を着てザックカバーを付けていたのは数人だけだった。他の人々は100円ショップで売っているような薄いビニール合羽を着ていた。無論ザックカバーなど持っていないので少し歩けばザックはびしょびしょになる。靴もスニーカーの人が多く、流れ落ちる雨水により靴下まで濡れていたようだった。

大勢の人が雨に濡れた状態で山小屋に入るのだから、山小屋の従業員もよい顔をしない。客扱いをされずにまずい夕食を食べ、狭い部屋に多数が押し込まれて雑魚寝をした。翌朝は山頂まで行列で登った。今は改善されていると思うが、各山小屋のトイレの悪臭も気になった。

更に、登山者のマナーが悪い。登山道の真ん中で休憩する人、平気でごみを捨てる人、山小屋で寝てから大声で話す人等きりがない。これは無恥というより無知なのかもしれない。

雲海から八ヶ岳や奥秩父の山々が島の様に頭を出している光景を印象深く記憶

しているが、それをさしあいても富士登山は楽しかったとは思わない。

このように富士山を見てもさほど感激しない理由の一つは登ったときの印象が良くなかったからだ。

もう一つは、富士山を長い間充分に見てきたからだ。私は24歳から71歳まで八王子市内の会社に勤務していた。職場は何度も変わったがデスクが南側の窓際にあることが多く、振り向けば終日富士山を望むことができた。季節ごとの積雪の違い、冬に山頂から雪煙が上がる姿、夕日が沈む位置が山頂の左から右に日毎に移動する状態などを楽しめた。また、我が家から150mほど歩いて高台に登れば富士山を見ることができる。旅行でもしなければ富士山を見る機会がない地域に住んでいる人が富士山を見たときの感激と私の感激が違うのは当然かもしれない。

加えて余談になるが、私が勤務していた会社のコンペチターに社名に「富士」が付く会社があった。富士山の写真は社内に掲示しないと若いときに聞いたことがあり、それが無意識の内に頭に刷り込まれていたようだ。社名に「富士」が付く会社は多数あり、今はそんな意識はないのでパソコンは富士通のものを使用している。

私が山を見たとき最も感激する山は富士山でなく槍ヶ岳である。名の通りに天を突くような鋭峰を見つけたときには歓声を挙げたくなる。しかし、槍ヶ岳の前衛として標高2,800m前後の高峰が立ちはだかり、下界で望める場所は限られている。山に登れば長野県だけでなく山梨県や群馬県からでも見えることがあるが、あまり離れていると肉眼で視認できても写真には撮りにくい。槍ヶ岳を間近で充分に見ることができるのは東方に位置する常念岳や蝶ヶ岳などであるが、最低1泊はしないと登れない。日帰り

で簡単に登れて槍ヶ岳をよく見ることができる山としては美ヶ原がある。但し、以前は松本からバスで簡単に登れたが、今はバス運行が廃止されマイカーがないと登れなくなった。他にも松本周辺に槍ヶ岳を見ることができる山がいく



つかあるが、同様にどれもアプローチが不便である。そこで、私はときたま霧訪山という山に登る。霧訪山へは塩尻と辰野の間にある小野という駅で下車し、そのまま歩いて登れる。ここでは、美ヶ原と同等の距離で望むことができる。



槍ヶ岳に次ぐ山としては北岳と鹿島槍ヶ岳だが私には甲乙付け難い。

北岳は、夏には種々の高山植物が咲き乱れ、東面に日本屈指の岩壁（バットレス）を有する日本第2の高峰であり、

甲府盆地から

仰ぐことができる。ただ、富士山のように独立峰でなく、槍ヶ岳ほど顕著な姿をしていない上に、僅

か4m低い間ノ岳や3,000mを超す農鳥岳が南方間近の稜線に控えてるので、山好きの人でないと気が付かないだろう。

鹿島槍ヶ岳は、槍



という名が付いても槍ヶ岳の様に鋭峰でないが、北峰と南峰を有する美しい双耳峰だ。北方の五竜岳から縦走したとき八峰キレットという難所を越すが、鹿島槍ヶ岳に辿り着くと緊張がほぐれて力が抜ける。前衛の山々は1,300m～1,500m程度なので、少し高所に登ればその姿を堪能できる。例えば、信濃大町駅から歩き、少し坂を登った所にある大町山岳博物館の前は一級の鑑賞地だ。但し、鹿島槍ヶ岳は北岳以上に名も姿も知らない人が多いだろう。

深田久弥は「日本百名山」で下記の様に記述している。

槍ヶ岳のユニークな岩の穂は見紛うことはない。どこから見てもその鋭い三角錐は変わることがない。それは悲しいまでにひとり天をさしている。

北岳は謙虚な山である。奇矯な形態でその存在を誇ろうとするところもない。それでいて高い気品をそなえている。つつましく、しかも凜とした気概をもって立っている。

鹿島槍ヶ岳は北槍と南槍の両峰がキッとせり上がりついていて、その二つをつなぐ吊尾根、その品のいい美しさは見あきることがない。非通俗的な美しさである。粹でありながら決して軽薄ではない。いったんその良さがわかると、もう好きで堪らなくなる。